

雑巾はもう絞れないほどに乾いているか？ 予算編成のおはなし。

ぬ

れ雑巾を絞れば水が出る。強く絞ればそれだけたくさん水が出る。予算編成も同じことです。限りあるお金を、どれだけ効率的に使うか。そのためには、ギリギリまで知恵を“絞って”、無駄という“水”を絞り出さなければなりません。懐(ふところ)が温かい時、財布のヒモが緩むのは人情です。懐が寂しくなると初めて節約の知恵が出てきます。行政も“生き物”ですから、バブルの時は財布のヒモが緩みっぱなしでした。決して褒められたものではありませんが、それもひとつの時代だったというしかないでしょう。



分

権編成方式。三浦市が平成16年度予算編成にあたって採用した新しい予算編成方式です。各部、各課から上げられてきた予算要求を、財政当局が集権的に査定をしたり、一律にシーリングをかけたりするのではなく、あらかじめ各部に財源を配分し、その限度内で各部が自主的に予算編成をする方法です。各部には限られた財源をうまく遣り繰りする判断力が問われます。ほぼ同じような方法を、東京都足立区や横浜市などが採用しています。三浦市では、昨年(平成15年)の9月に発表した「行政革命戦略 5つの宣言」の「財政戦略 身の丈メリハリ宣言」において、この方式を採用することを決定しました。足立区は平成15年度、横浜市では平成16年度予算編成から採用しています。これはもう、ひとつのトレンド(潮流)です。今後も多くの自治体が同様の方式を採用することになるでしょう。まだまだ試行錯誤の段階にありますから、経験を繰り返しながら欠点を見つけだし、改善を積み重ねていくことが必要でしょう。



結

果は、去る3月に行われた三浦市第1回市議会定例会において承認された平成16年度予算に見ることができます。一般会計予算総額が昨年度比マイナス3.6%。減税補填債の借換分の影響を除くと、実質マイナス11.2%となりました。公債費、予備費、人件費を除いて、市民サービスに直接使う予算の額だけを対象にして昨年度と比較すると15.4%のマイナスです。元手となる財源が少なくなっているのですからマイナスは仕方がないとはいえ、これほどのマイナスが実現したのは、分権編成方式によって、各部が事業の統合や効率化を積極的に進めたからにほかなりません。次号以降で、詳しく解説しますが、これほどのマイナス予算であっても、市民サービスを大幅に減らしたり、質を低下させることはしませんでした。

か

つて役人は、1円でも多くの予算を獲得することが使命であり、役人としての手腕が問われる場面でした。しかし、今は違います。1円でも少ない予算で、同じだけの質の市民サービスが地域社会で供給されている状態を維持すること。これが役人の使命であり、問われるべき手腕です。その意識の切り替えが、これからの行政経営の健全化には不可欠な条件です。(次号に続く)